

Title	日本家族社会学の社会学：小山隆とアメリカ社会学との関係から
Sub Title	
Author	水野, 宏美(Mizuno, Hiromi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2004
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.58 (2004. ) ,p.81- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成15年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000058-0081">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000058-0081</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

うに生きるのかという人生設計の課題を援助する必要がある。

## 文 献

- Adler, A. & Chua, C. 2002 Management of ADHD in Adults. *Journal of Clinical Psychiatry*, 63 (Suppl. 12), 29-35.
- American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders* (forth edition). American Psychiatric Association, Washington, D.C. (米国精神医学会 高橋三郎他訳 1995 DSM—IV 精神疾患の分類と診断の手引き 医学書院)
- Asperger, H. 1994 Die Autistischen Psychopathem im Kindersalter. *Arch. Psychoatr.*, 117, 76-136. (訖摩武元訳 1993 小児期の自閉的精神病質 児童青年精神医学とその近接領域 34, 180-197.)
- Burke, J. & Loeber, R., et al. 2002 Oppositional Didiant and Conduct Disorser: A Review of the Past 10 years (Part 2). *Journal of American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 41(11), 1275-1293.
- 榎本直恵・久野節子・田中千代 2002 広汎性発達障害—高機能自閉症とアスペルガー症候群を中心に発達, 23(90), 9-15.
- 福島 章 2000 人格障害の歴史—カントからクロニンジャーまで— ころの科学, 93, 10-15.
- 後藤雅博 2003 日本における家族心理教育 精神神経学雑誌, 105(2), 243-247.
- 星野仁彦 1999 アスペルガー症候群の青年期における諸問題 精神科治療学, 14(1), 15-22.
- 石坂好樹 1999 アスペルガー症候群の症状の特異性についての精神病理 精神科治療学, 14(1), 39-46.
- Kanner, L. 1943 Autistic disturbance of affective contact. *Nervous Child*, 2, 217-250.
- 小林隆児・服部盛久 1999 アスペルガー症候群の治療—心理社会的アプローチを中心に— 精神科治療学, 14(1), 53-57.
- Loeber, J. & Lathy, B., et al. 2000 Oppositional Didiant and Conduct Disorser: A Review of the Past 10 years (Part 1). *Journal of American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 39, 1468-1484.
- 中根充文・中根秀之・現代社会と社会精神医学 2001 最新精神医学, 6(4), 317-323.
- McDougle, J. & Stigler, A., et al. 2003 Treatment of Aggression in Children and Adlescents with Autism and Conduct Disorder. *Journal of Clinical Psychiatry*, 16-25.
- 南 隆男 2004 キャリアデザイン 求められる“成人”理解へのアプローチ AERA Mook コミュニケーション学がわかる. 朝日新聞社.
- 太田昌孝 1999 アスペルガー症候群の成人精神障害 精神科治療学, 14(1), 29-37.
- 佐藤泰三 2001 行為障害の comorbidity—発達障害としての観点から— 臨床精神医学, 30(6), 611-615.
- 杉山登志郎 2002 高機能広汎性発達障害における統合失調症様状態の病理 小児の精神と神経, 42(3), 201-210.
- Wing, L. 1981 Asperger's syndrome: A clinical account. *Psychological Medicine*, 11, 115-129.
- 山本和郎 2001 コミュニティ心理学の臨床分野への貢献 そしてさらなる展開へ コミュニティ心理学研究, 5(1), 39-48.

\* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻

## 日本家族社会学の社会学

—小山 隆とアメリカ社会学との関係から—

水 野 宏 美\*

### 1. 問題の所在

20世紀を終え、日本の家族研究は戦後の膨大な研究蓄積を整理する時期にある。戦後の展開を振り返ってみると、家族の実証研究の前提となる家族概念および家概念をめぐる概念的諸議論があり、

なかでも核家族概念の妥当性、研究上の有用性をめぐる山室周平と森岡清美らによる「核家族論争」、日本の「家」と家族概念をめぐる「有賀・喜多野論争」は、大きな論争として家族社会学者に記憶されている。これらの論争は 1960 年代を通して継続されたが、1970 年頃から核家族概念に基づく枠組みに依拠した集団論的研究が優勢（田淵，1999）になり、1960 年代後半から 1970 年代にかけては、小集団としての核家族というパラダイムを前提とした理論研究が多くなった。この核家族パラダイムと整合的であったのが、役割理論（象徴的相互作用論）、構造・機能理論であった。

以下で家族社会学の展開を見ていくが、家族社会学の成立期をいつと見るかは、森岡（1981）のように戸田貞三の『家族の研究』（1926）とする見方のほか、核家族論争や、戸田の『家族構成』（1937）の家族研究のあり方の評価をめぐる「有賀・喜多野論争」が始まりその後の研究の流れが方向づけられた 1960 年代とする見方がある。ここには、戸田を家族社会学のなかにどのように位置づけるかという問題があるわけであるが、ただ、戦後においては 1960 年代が重要な時期であったというのは、家族社会学を研究する者にほぼ共通した認識となっているようである。

戦後、家制度が否定され、新しい民主的な家族モデルを求めて欧米の諸理論が参考にされたが、なかでもバージェスとロック、マードック、グード、パーソンズの影響力は大きかった。バージェスに依拠した「制度家族から友愛家族へ」にあわせて、マードックに依拠した「直系家族から核家族へ」という変動論が論じられるようになったことは、よく知られている。その核家族をパラダイムとした研究に対して、その後、フェミニズム、社会史の影響を受けた近代家族論、構築主義的研究などからの批判や提案が相次ぎ、当たり前だと思われてきた家族のかたちを相対化する主張が出て、近年の家族社会学は方法論の再検討といった課題に直面する段階にきている。池岡（2003）も、1960 年前後に確立された実証主義的な家族研究がポスト実証主義的な家族研究のチャレンジを受けているのが家族社会学研究の現状である、という認識を持っているのである。

こうして見てみると、1) 小山隆が中心となって 1955 年に発足した家族問題研究会や、その後に森岡清美が中心となって 1968 年に発足した家族社会学セミナー（1991 年に日本家族社会学会へと発展的解消）のテーマの変遷などを歴史的に検討する作業、2) 戦後、核家族をパラダイムとして展開した日本家族社会学を、欧米とくにアメリカの研究動向を日本に受容する問題との関係から検証する作業、はとりわけ重要であると思われる。

本研究では、家族社会学の領域内で家族社会学の展開をどのように把握しているのかを明らかにするとともに（2 節）、戦後 GHQ の一部局である民間情報教育局 CIE やユネスコを経験した小山隆が戦後日本の家族社会学を組織的にもリードした経緯をおさえ（3 節）、この展開のなかで家族社会学から零れ落ちた家族研究があることに触れておきたい（4 節）。

## 2. 日本家族社会学の展開

家族社会学の展開を見ると、森岡（1981）は、戸田貞三『家族研究』（1926）、敗戦、第 9 回国際家族研究セミナー（1965）という出来事によって 4 期に区分して整理している。敗戦より前を、戸田の『家族研究』が著された 1926 年以前と以後に区分して、前者を家族社会学成立の前史としている。1 期の理論的背景はコント、スペンサー、2 期の理論的背景はマックス・ヴェーバー、デュルケムである。他方戦後については、第 9 回国際家族研究セミナーが東京に招致された 1965 年を境に、大きく 2 期に区分している。3 期の理論的背景はアメリカのパーソンズに代表される構造機能主義であり、4 期もとくにアメ

表

森 岡 (1981)		石 原 (1992)	
区 分	人 物	区 分	人 物
1) 1925年まで (進化論的発想による制度的巨視的研究)	有賀長雄 建部遯吾 河川嗣郎 穂積陳重	1) 1945年までの戦前期 (科学的・実証的研究の形成期)	
2) 1926-45年 (日本家族社会学成立)	戸田貞三『家族研究』 岡田 謙 牧野 弐 鈴木栄太郎 有賀喜左衛門 小山 隆 喜多野清一 及川 宏 善生永助 清水盛光		戸田貞三『家族構成』 (集団論的アプローチ)  有賀喜左衛門 鈴木栄太郎 (制度論的アプローチ)
3) 1946-65年 (家族変動論・構造機能主義)	玉城 肇 喜多野清一 小山 隆 第9回国際家族研究セミナー	2) 1950年代末までの戦後期 (家族近代化論と伝統的家族研究の並立・競合)	川島武宜 小山 隆 (家族近代化論) 喜多野清一・岡田 謙 (伝統的家族研究)
4) 1966年以降	喜多野清一 小山 隆  姫岡 勤 上子武次 森岡清美『家族周期論』 望月 嵩 坪内良博・前田成文	3) 1960年代 (家族社会学の確立期)	山室周平 vs. 森岡清美, 老川 寛 (核家族論)  小山 隆 (構造機能主義)
		4) 1970年代 (定着・発展期)	小山ら 姫岡ら 山根常男 森岡清美『家族周期論』 上子武次 家族問題研究会 家族社会学セミナー
		5) 1980年代 (パラダイムの動揺期)	石原邦雄 野々山久也 (集合論パラダイム補強)  女性論 新しい社会史・家族史 家族政策への要請と、これに批判的なマルクス主義的なアプローチ ライフコース論 (森岡) (集合論パラダイム動揺)

リカを中心とした研究者たちとの協力が見られるとする。

それに対して、石原(1992)は、科学的な社会学的家族研究の成立と展開を跡づける観点から、布施(1987)に対応して、次の5期に区分している。1) 科学的・実証的研究の形成期 (1945年までの戦前

期)、2) 家族近代化論と伝統的家族研究の並立・競合(1950年代末までの戦後期)、3) 家族社会学の確立期(1960年代)、4) 定着・発展期(1970年代)、5) パラダイムの動揺期(1980年代)である。

森岡(1981)と石原(1992)の両者の違いを比較するために、ここに表を作成してみよう。

### 3. 小山 隆の働き

戦前から実証的家族研究に携わっていた小山隆が、1946年にGHQの一部局である民間情報教育局CIE(Civil Information and Education Section)の世論および社会調査部顧問となり、家族調査研究を担当したことは、小山にとってだけでなく、日本の家族研究にとって大きな転換点となった。戦前には制度的・歴史的観点からなされることの多かった家族研究が一変することになるのである。

小山は、CIEでアメリカの科学的な社会調査に基づく実証的な研究の影響を受け、戦後の日本の家族研究を構想した。人類学者マードック『社会構造』(1949)の核家族論などアメリカの影響は強かった。小山が1955年に家族問題研究会を組織したこと、国際的な家族研究の基礎を築いていたこと、の今日的意味は大きい。

家族問題研究会は、戦後の社会的変革、とりわけ旧家族制度の解体によって現実の家族にどのような問題が発生するのか解明することを目的とした。社会学のほか、隣接分野の研究者、家庭裁判所や国立精神衛生研究所などの実務家も参加する学際的な家族研究の場であり、研究と実践の連携まで視野に入れていた。この共同研究の成果として、計量調査と事例調査を併用した『現代家族の研究：実態と調整』(1960)、『現代家族の役割構造：夫婦・親子の期待と現実』(1967)、『現代家族の親子関係：しつけの社会的分析』(1973)など三部作があり、また家族問題研究会は、1975年から『家族研究年報』の刊行を始めている。山室周平は、小山に指導された家族問題研究会の特徴として、学際性、理論と実践の統合、国際性、若手研究者の研究の尊重、の四点を挙げた。この家族問題研究会は、現在でも活発な活動が続いている。

1963年に小山は、ユネスコ・フェローとして、アメリカ・イギリス・ドイツの主要な家族研究者を訪ね、とくにミネソタ大学のR.ヒル、ハーバード大学のE.ヴォーゲルらと交流を深めた。1965年9月には、第9回国際家族研究セミナーが東京に招致されることとなる。この国際家族研究セミナーの母体は、国際社会学会の家族研究委員会(ISA's Committee on Family Research)で、委員長のヒル教授の指導のもとに、小山が組織委員長となって日本ユネスコ国内委員会と日本社会学会の共催で行われた。喜多野清一、牧野巽、岡田謙、山室周平、山根常男、青井和夫、中野卓が組織委員で、事務局担当は森岡清美であった。高田保馬、綿貫哲雄、新明正道、武田良三、尾高邦雄、福武直らが会場に姿を見せた。このセミナーは、日本の家族研究が国際的接触面を急速に拡大するのを促した。このインパクトのもと、森岡清美を中心として1968年に家族社会学セミナーが発足し、1991年に解散、日本家族社会学会が設立されることになる。

### 4. 結 語

こうして家族社会学の王道とも言うべき道筋が示されたわけであるが、実は、2節に示した表には、家族を社会的に取り扱った研究でありながら、家族社会学の展開から抜け落ちた家族研究群がある。石原は、核家族論争、構造機能主義の影響、第9回国際家族研究セミナー、『家族社会学』の教科書作成が見られた1960年代は家族社会学の確立期であるとしながら、この時代を次のように反省する。

「要するに、この時期にいたって、個別の対象（家ではなく家族）を持ち、独自の研究枠組みと方法（近代家族の集団論的パラダイム）についての幅広い合意が形成されたことをもって、日本における家族社会学が確立されたといえるであろう。しかし、これは反面においてある種の偏りをもったものであった。戦前からの多くの実績を持つ、家と同族団に関連した研究はこの時期も成果を出し続けていた。しかし、核家族論と構造機能主義を基調とする家族社会学の体系化の流れは、こうした研究の成果を十分に吸収し、継承するまでにはならなかったことは否めない」「家族社会学セミナーもこの課題に取り組んだが、十分に成功したとはいえない」（石原，1992: 65-66）。

このことは森岡自身も認める点である。「家族社会学セミナーに、有賀喜左衛門や中野卓が関わらなかったことは、家族を制度体として捉える立場、地域共同体や全体社会の構造の一部として扱う立場が弱くなる結果を招いたと考えられる」（森岡，1992: 7）。森岡清美は二足のわらじで、宗教社会学から家を、家族社会学から家族を研究したと評された。それは取りも直さず、有賀流の「家パラダイム」と、そこから区別することから生成した「核家族パラダイム」を研究の両輪としたという意味である。

戦後の核家族論をリードしたと目される小山隆は、『山間聚落の大家族』に見られるように、彼自身もまた戦前には大家族の研究をしていた。だが戦前から戦後にかけて、その研究姿勢は断絶するものではなく、一貫して実証的に家族の現実を客観的に把握していたのであり、戦後の民主改革のなかで、小山は現代家族の現実問題を見ることに力を注いだのだとされる。通常科学化の過程における家族社会学の功罪は、家族社会学という枠組みから零れ落ちた家族研究群を視野に入れつつ、詳細に検討されるべき重要な課題となっていると考えられる。

## 文 献

- 布施晶子 1987 「家族研究の軌跡と課題」『社会学評論』38(2): 150-166.
- 池岡義孝 2001 「小山隆編『現代家族の研究』共同研究によって切り開かれた戦後の家族社会学」山田昌弘 (ed.) 『家族本40』平凡社: 297-302.
- 2003 「戦後家族社会学の成立と家族調査」社会科学基礎論研究会 (ed.) 『社会調査の知識社会学』2, ハーベスト社: 61-77.
- 石原邦雄 1992 「日本における家族社会学の確立と展開」東京都立大学『人文学報』233: 61-79.
- 川崎澄雄 1982 「家族社会学; その動向」家族社会学セミナーを中心に『鹿児島経済大学社会学部論集』1: 75-85.
- 家族問題研究会 1974 『頌寿 小山隆博士年譜・著作目録』.
- 1984 『家族研究年報』10 (家族問題と家族社会学 小山隆先生を偲んで): 1-40.
- 木戸 功 1998 「『家族社会学』の構築『核家族論争』を再考する」家族問題研究会『家族研究年報』23: 2-17.
- 小山 隆 1935 「日本社会学の科学的意義」『社会学評論』4: 1-17.
- 1980 『軌跡五十年』御茶の水書房.
- 1988 『山間聚落の大家族』家族問題研究会 (ed.), 川島書店.
- 松原治郎 1969 『核家族時代』NHK ブックス.
- 三浦直子 1998 「小山隆 1900-1983 実証的家族研究の重鎮」川合隆男・竹村英樹 (eds.) 『近代日本社会学者小伝: 書誌的考察』勁草書房.
- 森岡清美 1981 「わが国における家族社会学の発達」『成城文芸』96: 1-13.
- 1992 「世代の観点からみた家族社会学セミナー」『成城文芸』138: 1-12.
- 落合恵美子 2002 「二足のわらじ」の到達点 森岡清美の足跡と現在」比較家族史学会 (ed.) 『家族 世紀を超えて』日本経済評論社: 55-67.
- 老川 寛 1984 「家族社会学における小山隆」家族問題研究会『家族研究年報』10: 5-14.
- 1988 「小山隆の家族研究」明治学院大学社会学会 (ed.) 『明治学院論叢 社会学・社会福祉学研究』77-78: 323-412.

- 老川 寛 1999 「小山隆の実証的家族研究」東洋大学社会学部『東洋大学社会学部 40 周年記念論集』49-92.  
 田淵六郎 1999 「家族の理論研究とその枠組み」野々山久也・渡辺秀樹 (eds.)『家族社会学入門 家族研究の理論と技法 (社会学研究シリーズ 1)』文化書房博文社: 277-294.  
 高橋統一 1998 「鈴木栄太郎と小山隆 社会学と社会人類学の接点」『家隠居と村隠居 隠居制と年齢階梯制』岩田書院: 108-118.

\* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

## 観光地における〈歴史〉の役割

——鎌倉を事例として——

高 岡 文 章\*

### 0. はじめに

鎌倉市はおよそ 17 万人の人口を抱える郊外住宅都市であると同時に、年間約 2,000 万人の来訪者が訪れる日本有数の観光地でもある。鎌倉の観光資源は寺社、旧跡、やぐら、切り通し、自然、植物、海岸、マリンスポーツなど様々であるが、なかでも歴史的な観光スポットの人気は突出している。また観光ガイドブックにおいても鎌倉が「古都」「歴史都市」であることが強調されている。本研究は、鎌倉において〈歴史〉が果たす役割について考察を行った。歴史という語は通常、時間的な連続性を有し、特定の時間軸上にプロットされるものを指す。しかしここではそのような歴史学的な用法とは対照的に、あくまでも観光対象としてまなざされ消費される過去・伝統・昔・古さなどの総称として〈歴史〉という語を用いている。

本研究は (1) 鎌倉という地域が〈歴史的な場所〉と見なされるようになるプロセスをたどり、(2) 現在の鎌倉において〈歴史〉がどのように機能し、把握され、変容しているのかを明らかにする、という二つの作業を通じて、鎌倉における〈歴史〉の役割、および鎌倉の観光実態を多角的に探究することを目指した。

### 1. 〈歴史化〉のプロセス

鎌倉は京都や奈良と並んで古都と呼ばれ、日本屈指の歴史的な観光地とされている。鎌倉の〈歴史性〉や「古さ」は、まず鎌倉時代や中世を連想させるその地名によって正当化されており、また古都保存法によって法制化されている。しかし現在の鎌倉には鎌倉時代の遺構はほとんど存在しない。現存する最古の建築物は円覚寺舍利殿だがその創建年代は室町前期とされており、それ以外の多くの寺社建築は主に江戸期から明治期にかけて再建/創建されたものである。鎌倉は内部/外部の多様なまなざしによって〈歴史化〉されてきたのである。

そこでまずは明治期以降の鎌倉の歴史を辿ることにより、鎌倉が〈古都〉〈歴史都市〉と見なされるようになるプロセスを明らかにすることを試みた。明治初期の鎌倉はさびれた農漁村であったが、東海道線や横須賀線の開通を主な契機として、結核療養地・保養地・別荘地として繁栄するようになった。特に関東大震災後は郊外化の拡大に伴って郊外住宅地として整備が進んだ。

このように明治期の鎌倉が〈歴史的な場所〉ではなかったという事実はいくつかの先行研究がすでに